特集① 令和を迎えて

改元を経て、新しい時代を生きていく跡見生たちへ。

明治8（1875）年に跡見花蹊が創設した跡見学園。以来、大正、昭和、平成という時代において社会を見据えた女子教育を展開してきました。新しい時代を迎えた今、理事長に「令和」への思いを聞くとともに、5代にわたる学園の歴史を振り返ります。

インタビュー

跡見学園理事長 山崎一穎

「平和で良き時代を自分たちが作っていく」という気構えで。

山崎 一穎（やまざき かずひで）

専門は日本近代文学。森鷗外の研究者で、森鷗外記念会（文京区）顧問、森鷗外記念館（島根県津和野町）館長を務める。跡見学園女子大学学長を2度、跡見学園女子大学短期大学部学長、跡見学園中学校高等学校校長を歴任し、現在は跡見学園女子大学名誉教授、跡見学園理事長。

——先生は、現在、跡見学園の理事長をなさっていますが、昭和53（1978）年に40歳で跡見学園女子大学の学長になられたとき、「全国一若い学長」と話題になったそうですね。

私は大学卒業後、昼間は大学院で森鷗外の研究をし、夜は定時制高校の教師をしておりました。その後昭和45（1970）年、跡見学園女子大学文学部国文学科の近代文学担当の教師にと声がかかり、教壇に立ちました。跡見学園女子大学は昭和40（1965）年開学し、大学としては不十分なところが多々ありました。昭和53（1978）年に選挙で選ばれて学長に就任しました。平成元（1989）年まで、11年弱務めました。

私は森鷗外の研究をしていますが、学長になったことが研究にも大いに役に立ったと思っています。森鷗外は作家でもありますが、陸軍省医務局長も務めた官僚でもありました。「組織の中で生きること」と「自分のやりたいことを追求すること」を悩みながらでも両立をはかった人です。私も学長と研究者という2つの仕事に同時に取り組みましたので、森鷗外の思いに共感し励まされることが多かったのです。

――島根県津和野町にあります森鷗外記念館の館長もなさっていると伺いました。

ひょんなことから館長を引き受けることになりました。大学の教授時代、毎年学生たちと萩・津和野へゼミ旅行で行っていたのですが、平成3（1991）年の旅行の際、調べものがあって津和野町の教育委員会をお訪ねしたところ、逆に「森鷗外生誕130年」の企画の相談を受け、「知恵を貸してほしい」と依頼されたのです。それ以来のお付き合いとなり、平成7（1995）年の森鷗外記念館設立に参画し、運営協議会会長を務め、鷗外生誕150年の平成24（2012）年に館長に就任し、現在に至っています。

年6回は津和野町へ出かけます。明治天皇の即位式は津和野藩が司ったのですが、そのことも津和野町を訪ねてわかったことです。

――森鷗外は、明治・大正という時代の制約の中でも活躍する女性たちに温かい眼差しを向けていたと聞きました。

森鷗外は、ドイツ留学で大きく変わるんですよ。当時の日本では、女性は高等小学校を出れば十分といわれていて、その後の教育は家庭教師をつけるのが主流でした。鷗外も妹には個人教授を受けるようにといってドイツへ旅立ちました。その後ドイツで活躍する女性の姿を目の当たりにし、また、よく通っていた食堂でも、同席する女性との交流があり、大いに刺激を受けたようです。「女性が学問を身につけることは大事」と感じたのですね。鷗外の留学中に妹がお茶の水女子高等師範学校高等科に入学を希望したとき、父母は反対するのですが、鷗外は妹の受験を支援しています。

また、明治・大正は樋口一葉を始めとして与謝野晶子や平塚らいてうなどの女流作家が誕生しますが、森鷗外は彼女たちを好意的に受け止め、高く評価していました。直接の交流はなかったようですが、跡見花蹊のことも温かく見守っていたのではないでしょうか。

こんなエピソードがあります。労働運動が活発だった大正7（1918）年に与謝野晶子が「武士が武士をやめたように資本家は一度資本家を辞めて、工場経営を労働者にまかせたらいい」と発言したのですが、森鷗外は「それは何も知らなさすぎる」と言いつつも、彼女の発言を「こういう発想をする人がいるということは認めるべきだ」と柔軟性のある姿勢を示しています。

明治の文豪、森鷗外。

森鷗外胸像
（国立国際医療研究センター所蔵）

本名は森林太郎。文久2（1862）年、現在の島根県津和野町に生まれる。明治5（1872）年に上京し、東京帝国大学医学部卒業後軍医の道を進む。明治17～21（1884～1888）年にドイツに留学。その後陸軍軍医総監を務めるなど官僚としての仕事に就きながら小説を書いた。

主な作品は「山椒大夫」「雁」「舞姫」「阿部一族」「高瀬舟」。大正11（1922）年に60歳で亡くなる。遺言として親友吉田増蔵に「由緒正しい元号の制定をしてほしい」と伝えたと言われている。

――先日、5月1日より元号が「令和」になりましたが、森鷗外も「明治」から「大正」への改元を経験していますね。

元号とは時に名を付けるということです。名と時代の質が一致するのが理想です。森鷗外は、「明治」「大正」という元号の付け方にある疑問を持っています。「名前の出典は由緒正しくなければならない、それを調べるための専門機関を設置するべきである」と提唱しています。まさにその通りだと思います。けれども現在に至るまで専門機関は設置されていませんね。例えば、「れいわ」と読むか「りょうわ」と読むかなどいろいろな意見が出ています。

森鷗外は大正天皇の即位式に招待され列席しています。大正4（1915）年11月10日に京都御所で行われたのですが、そのときの様子をまるでルポルタージュのように新聞に書いたものが『盛儀私記』です。このとき森鷗外は自分の子どもたちに「ここに立っているんだよ」と図解の葉書を送っています。

跡見花蹊はこの記事を読んで大変感動し、跡見学園の会報『汲泉』に感想を述べ、『盛儀私記』の全文を掲載しています。

――跡見花蹊も、皇室とのつながりがあったそうですね。

開学当初、明治天皇の皇后である昭憲皇太后から「生徒たちが紫の袴を着用すること」を助言されています。その後も皇室との交流は続きます。昭憲皇太后は大正3（1914）年に亡くなられるのですが、翌年の一年祭を、跡見学園として跡見学園の講堂で行っています。

また、大正天皇即位を記念して大正4（1915）年に、「新しい御代をめでたい」と制服を決めています。それまでは紫袴の上は自由だったのですが、華美にならないようにと、紫の木綿の着物を制服としました。さらに11月には学園として即位をお祝いする奉祝式典を行い、生徒たちは短冊に歌を書き、それを「菊の香たかし」という冊子にまとめて宮内庁に献上しています。

明治45（1912）年花蹊先生は勲六等宝冠章を受章したので、その記念に校友会は大正4（1915）年、黒田清輝に肖像画を依頼し、文展に出展ののち花蹊先生に贈りました。現在、女子大学の花蹊記念資料館に掲げられています。

当時の跡見学園を見るときに忘れてはいけないのは、学祖である跡見花蹊の思いや、それを実現していった当時の教職員の人たちの頑張りです。明治32（1899）年に「高等女学校令」が出され、国がカリキュラムを定めます。しかし跡見女学校はお花やお茶、お琴などを正課の授業として行っていたので高等女学校ではなく、相当校として認められました。時代が進み、専門学校や大学に進学するために高等女学校の卒業資格が必要となったとき、「跡見学園は高等女学校を卒業した者と同等の学力を有する」という認定を受けます。

文部省の認可を得るために三たび奔走した当時の学園の上層部の方のご苦労を思うと、跡見学園の「しなやかな女性として社会に役立つ」という伝統は引き継いでいかなければと思います。

さて、「令和」という新しい時代を迎えましたが、この元号には「平和な良い時代を作っていこう」という願いが込められています。皆さんには「自分たちが新しい良き時代を作っていくんだ」という気構えを持ってほしいですね。それが跡見花蹊の願いを引き継ぐことではないでしょうか。

花蹊の絵葉書で手紙を出した森鷗外。

森鷗外記念館（島根県津和野町）所蔵
明治39年2月11日付

跡見花蹊の描いた絵は、印刷され絵葉書として販売されていました。森鷗外は、妻志計（しげ）への手紙に、この絵葉書を選んでいます。「明十二日午後七時半紅葉館へ人力車を迎へに遣わされ度候又例の湯を御わかしおき下され度候　二月十一日」とある。